

Н.Н. ストラホフ 「宿命的問題」

松本賢一 訳

解説

オムスクの要塞監獄における4年の苦役を含む都合8年間のシベリア生活を終えて、首都に戻ったドストエフスキイが兄ミハイールと共に雑誌『ヴェレーミヤ (Время)*』を発刊したのは、1861年1月のことであった。農奴解放前夜のロシア文学界で、西欧派とスラヴ派の折衷型とでもいえる思潮「土壌派」の牙城となり、ドストエフスキイ自身の小説作品としては「死の家の記録」や「虐げられた人々」の発表舞台としての役割を果たしたこの雑誌は、1863年4月号をもって終わった。発行禁止処分を受けたからである。当局が問題視したのは「ロシア人」というペンネームで発表されたН.Н.**ストラホフの論文「宿命的問題 (Роковой вопрос)」であった。

ここに掲げるのは、19世紀ロシアの批評家、Н.Н.ストラホフのこの論文「宿命的問題」の全訳である。1863年、ロシア統治下のポーランドにおける反乱を受けて書かれたこの論文は、当時のロシア論壇におけるちょっとした事件となった***。題名の「宿命的問題」とはポーランド問題を指している。それが「宿命的」であるというのは、この問題が宿痾の如くロシアと切り離しようのないものであると共に、場合によってはロシアを（またポーランドを）死に至らしめる可能性を秘めているという認識の下に付けられた形容語であろう（ロシア語の形容詞<роковой>は英語の<fatal>に相当する）。

今日の目から見れば、ストラホフのこの論考は、学術的にそれ程の価値があるものではない。ストラホフの書いた物としては緻密さに欠けるし、ロシアに敵対的なポーランドの勢力を批判しているのか擁護しているのか曖昧な点がある。そしてその曖昧さこそが、ロシア政府当局の誤解を生んだのであろう。政府の役人たちは、スラヴ派ストラホフの文章を読み誤ったのである****。

ごく雑な文化論的な論考ならば、涉猟すれば当時のモスクヴァ、ペテルブルクの雑誌や新聞に数多く存在するであろうが、特にこのストラホフの論文を翻訳発表する意義には積極的なものと消極的なものの二つある。

積極的な意義とは、この論考がドストエフスキイの人生、その創作活動史との関りにおいて得られるものである。1863年5月、ストラホフの「宿命的問題」が^{わざわい}禍してドストエフスキイ兄弟は『ヴレーミャ』発行を続けられなくなり、名義上の発行人であったドストエフスキイの兄ミハイールは、奔走の末、翌1864年3月、新雑誌『エポーハ (Эпоха)』の発行に漕ぎ着けた。が、ミハイールは過労と不摂生が理由で急死し、ドストエフスキイには莫大な借財と兄の家族の扶養問題が残った。因みにこの時期、ドストエフスキイの最初の妻マリーヤは重篤な結核の床にあった（同年4月没）。後に二度目の妻アンナとの結婚を経て小康を得ることになるドストエフスキイの経済生活の苛酷さは、この頃から始まった。しかしながら、長続きしなかったとはいえ（『エポーハ』は1865年3月に資金難のため廃刊した。）新雑誌の4月号にドストエフスキイが発表した「地下室の手記」は、ドストエフスキイの創作活動における新たな局面の展開を告げるものであった。極めて大雑把な言い方をすれば、かつて日本でトルストイの垂流と受け取られた程に博愛主義的傾向の強い作風から、人間の暗部の剔抉、合理主義的人間観への批判等、いわば今日ドストエフスキイ文学の本質と思われるような要素の強い作風への変化がこの時期から始まったのである。「地下室の手記」以前の作品が「地下室の手記」以後の作品に何ら関係を持たない訳ではないが、「地下室の手記」は、テーマの上でも、細部の上でも「罪と罰」以後の長篇群に少なからぬ痕跡を残している。たとえ内容の上で刮目すべき点が無いとしても、ドストエフスキイの生活、及びその創作史を考える上で、ストラホフ

のこの論考は資料的価値を持っている。

「宿命的問題」を翻訳紹介する消極的な方の意義とは、ストラーフがポーランドを論じる時に否み難く^{にじ}滲み出る、ロシアからのポーランドに対する愛憎半ばするアンビヴァレントな感情である。同じスラヴ民族でありながら、異なるキリスト教（カトリック）を奉じ、ロシアを抜きにして直接西欧から文化を吸収し、その成果を享受している国、同じスラヴ民族でありながら、西欧と同じ目でロシアを、ロシア人を見ている国。農奴解放によって、西欧に遅れつつ近代化（資本主義化）の道を漸く歩み始めた19世紀中葉ロシア・インテリゲンツィヤのポーランド観の全体像を、ストラーフのこの論考に求めることには大いに危険があるものの、共感を覚える者は少なくなかったに違いない。ストラーフ自身によれば、ドストエフスキもその一人である*****。

解説の最後として、ストラーフがこの論考を書く機縁となった1863年のポーランド反乱について簡単に見ておこうと思う。ポーランドという国については引き裂かれた悲劇の国というイメージが先行するきらいがあり、そこへ第二次世界大戦中のナチスによるホロコーストの記憶が重なるためか、ポーランドは専ら弱小国として、被害者として捉えられる。しかしながら歴史をもう少し遡って考えれば、大国ポーランド、侵略者ポーランドの時代があったことも確かであり、ロシアにとってポーランドは、リューリック朝とロマノフ朝の狭間にロシアに侵入し、一時はモスクヴァにまで至って「動乱（смута）」時代を現出せしめた国であった。このことについては本文でもストラーフが触れている。「タタールの軛」、ナポレオンによる侵略と並んで、19世紀のロシア人にとってこのポーランドによる侵攻は忘れ難い被侵略の記憶である*****。

三度目の分割（1795）によって、ロシアはポーランド領のおよそ6割、人口のおよそ4割を支配下に置いた。一時ナポレオンによってワルシャワ公国が置かれたが、ナポレオンの敗北後、ウィーン会議によってポーランドは三列強によって再分割され、ポーランド王国（会議王国）にはロシアの総督が置かれた。1830年から31年の蜂起（十一月蜂起）失敗の後、次に起きた大きな解放運動がここで問題となる1863年の「一月蜂起」である。

クリミア戦争（1853-1856）における敗北によって自国の後進性を否応なく知らされたロシアは、新帝アレクサンドル2世のもと、人道的にも経済的にもロシアの近代化を阻害していた農奴制の廃止を始めとする改革に着手した。この状況を受けて、ポーランドの士族階級、市民階級は、他の列強の介入を期待しつつ蜂起の火の手を揚げた。1862年後半から醸成された不穏な空気に対して、ロシア側は若年不満分子の強制入隊という方策に訴えたが、これは失敗し、逆に暴動は組織化され、熾烈さを増してロシアとの国境におけるロシア警備隊攻撃にまで至った。亡命ロシア人からの支持こそあったものの、期待した列強の介入は無く（プロイセンなどはロシアとの間に協定を結んで国境を固め、プロイセン領ポーランド人を恫喝さえした）、ロシア国内ではむしろポーランドへの反発を招いた。反乱軍はゲリラ化し、国民政府を作るまでに至った。1863年4月武装放棄した者に対する大赦をロシア皇帝が約束したが、ポーランド内穏健派の妨害も奏功して反乱軍の誰一人としてこれに従わず、また、漸く腰を上げた列強ヨーロッパが国際会議を組織して仲介を試みたが、ロシア軍による反乱鎮圧は続き、1864年春には反乱軍政府も消滅した。以後、アレクサンドル2世はポーランドに対する温和な態度を硬化させ、ポーランドは完全に「ロシア化」された*****。

ストラーホフの論文「宿命的論文」が発表されたのは「ヴレーミャ」4月号であるから、この「1月反乱」がほぼ終息しつつあった時期のものであったと言える。蜂起とか反乱とかという表現よりもほぼ戦争に近い状況さえ呈したこの事件を、ストラーホフは報道的観点で執筆したのではなく、一種の文化論として執筆している。それはロシアとポーランドの間に横たわる問題を、過去から続き、今後も続くであろう容易に解決し得ない歴史的難問として、「宿命」として提示しようとする試みであった。

なお、翻訳の底本としては、*Н.Н.Страхов. Борьба с Западом. М., 2010.*の第一部 *Россия и славянство* に含まれる *Роковой Вопрос* (С.37-50) を用いた。同書の編集部による註釈（無記名）は「原註」として1、2、3...の番号で示し、必要な際は i、ii、iii...の番号を付して「訳註」とした。

*以下、当時のロシア出版物の名称は日本語で記し、括弧内にそのロシア名を記した。

**以下、この解説と本文に登場するロシア人の名前のファーストネームとミドルネーム（父称）のイニシャルはキリル文字で記した。

***同年7月6日 B.П.ボトキン はツルゲーネフにあてた書簡の中で、「雑誌『ヴレーミャ』が発行禁止になった——が、僕の思うに、誰一人として残念がってはいない」と書いたが、ツルゲーネフはそれに対して「とはいえ、『ヴレーミャ』の禁止を君のように残念がらずにいることは出来ない。いずれにしても穏健な雑誌だった。それに古い三文文士の僕などには雑誌が発行禁止になるというのは常に不気味な事なのだ」と返している。B.C. Нечаева. Журнал М. и Ф. Достоевских «Время» 1861-1863. М., 1972. С. 311.

****当時、国内における革命派の活発化を受けて、アレクサンドル2世の政府は出版物全体への監視を強め、ドストエフスキ兄弟の「ヴレーミャ」は、1862年から要注意扱いされており（実行に移されなかったが、同誌の発行禁止は一度は皇帝自身の同意も得ていた）、「ストラーフの不明瞭で余りにも手の込んだ論文は望ましからざる雑誌を禁ずる為の恰好のきっかけであった」という。B.C. Нечаева. Журнал М.М. и Ф.М. Достоевских «Время» 1861-1863. М.1972.С.308.

**** *B.C. Нечаева. Журнал М. и Ф.М. Достоевских «Время» 1861-1863. М., 1972. С. 306.

*****モスクヴァの赤の広場にあるミーニンとポジャルスキイの像は、この時のポーランドからの解放を記念するものであり、今なお観光名所となっている。

*****この項の執筆にあたっては、諸事典類の他、次の文献に多くを負った。Whitton, Frederik Ernest. *A History of Poland from the Earliest Times to the Present Day*. London. Constable and Company ltd. 1977.

宿命的問題

H.H. ストラーフⁱ

ポーランド問題について行われている、それ程多くもなく、それ程明晰でもない議論においては、ひとつ大事な特徴が視野から抜け落ちている。その方が楽だから、そして、より一般的な観点から物事を検討することにわれわれは慣れてしまっており、それゆえに問題の個別的で特徴的な性質が注意をすり抜けてしまうのである。だが今回は、事がわれわれにとって生々しい利害関係を持つものであるがゆえに、いっそうその特徴的なところを、少しでも、誰にとっても明晰なものとしておかねばならない。

^{なにゆえ}何故にポーランド人は声を挙げたのか。

今回の現象を、一般的な通りの良い概念に纏めるならば、普通われわれは次のように答えることになる。

- 1) 彼らが声を挙げたのは、^{コスモポリタン}世界主義的な理想、すなわち自らの生活改善と諸権利拡大の為である。
- 2) 或いは、ポーランド人が声を挙げたのは、民族の理想、すなわち^{ひとえ}単に他民族の権力から自らを解放せんが為である。

或る者はこれらふたつの理由の一方を蜂起の主たる本質的な原因と考えているし、また或る者はもう一方を理由であると考えている。詰まるところ、どちらの理由も同等と認めることが出来るのだ。こうも言える。ポーランド人は種々の^{コスモポリタン}世界主義的な理想に、そしてその内の一つである、全民族の平等という世界主義的理想の側に立っている、と。

事件の原因をこう決めてしまうならば、もはやわれわれは問題の解決にいかなる困難も見出さない。この単純明快な基盤の上に、われわれは容易かつ単純に然るべき結論を導き出すことが出来る。誰しも物事に対して一定の見解を持ち、自らの理解するようにそれを説明したいという抑えきれぬ要求があるのだから、われわれにしてもこの容易な解決の方を固く支持さえし、その解決の正当なることを執拗に主張するであろう。

ところが実際には、ポーランド問題にはひとつの特質があって、それはこの問題に恐ろしい程の深さと解き難い謎を与えている。この特質は明瞭となり、はっきりと、とても目に付くようになっているので、隠したり、何の意義も与えずにいたりすることは不可能なのである。われわれが、それに注意を向けまい、意義を認めまいと努めても、それは無駄なことであろう。そんな小手先細工に頼っても、われわれが勝ちを得ることも、事態が変化することも無いのは自明の理である。

ポーランド人をロシア人に対する敵意へと煽り立てるのは何であろうか。努めてポーランド人の気持ちに注意し、彼らの状態に身を置き、彼らの観点から見てみよう。世界主義的な理由や民族主義的な理由のほかに、明らかにこの敵意にはもう一つの要素が混じっており、それが極めて本質的なところで問題を規定しているとわれわれには思われる。ポーランド人がわれわれに抗する気になるのは、啓蒙された民族がより啓蒙されていない民族、または全く啓蒙されていない民族に抗するのと同じことなのである。闘争のきっかけがどのようなものであれ、その闘争が煽り立てられたのは、明らかに、一方は文明化された民族が、また一方は野蛮人が戦っているということによってである¹。

少なくともポーランド人の見解はこのようなものに違いない。敵意の構成要素としてのこの原因が根深い現実であるということを確信するためには、ポーランド民族が、文明という点で他のすべてのヨーロッパ諸民族と同等であると考える完全な権利を持っていること、そして、反対に、彼らがわれわれを野蛮人として以外に見ることが出来ないということを想起するだけで良い。

ポーランドは最初からヨーロッパの他の部分と同等に歩んでいた。他の西欧諸民族と共に、ポーランドはカトリックを受け容れた。そして他の民族と同様に自身の精神生活の中で発展してきた。学術において、芸術において、そして文学において、文明のあらゆる一般的現象において、ポーランドはヨーロッパという家族の他のメンバーたちと兄弟の交わりを結んだり競争したりして来たのであり、この家族の中で遅れたメンバーであったり、異質なメンバーであったりしたことは一度としてなかったのである。このことにつ

いてH.キレーエフスキイは短くこう述べている。

「15世紀16世紀のポーランド貴族は最も教養があったばかりでなく、ヨーロッパで最も光輝と学識があった。外国語の基本的知識、古代古典作品の深い研究、知的生活能力、社会的な生活能力の並々ならぬ発達は旅行者を驚かせ、当時のローマ法王使節の滯ることない視察対象であった。このような教養の高さの結果として、その文学は驚くばかりに豊かであった。その文学を構成していたのは古代古典作品の学術的注釈、部分的には洒落たポーランド語で、また部分的には標準的なラテン語で書かれた優れた、或いは拙劣な模倣作品、数多くの重要な翻訳、その一部はタツソーの翻訳の様に今なお模範的なものとされ、またある部分は、たとえば既に16世紀に行なわれたアリストテレスの全著作の翻訳の様にその文明の深甚さを証している。ジグムント3世の治世だけでも711名の著名な文人が綺羅星の如く輝き、80を超える都市で止むことなく印刷所が稼働していた」²

このように、ポーランド人は自らを全きヨーロッパ人と見ることが出来るし、自らを「聖なる奇蹟の国」に、人類の最高峰を形成し、人類史の中心的な流れを蔵するあの偉大なる西欧に数え入れることが出来るのである³。だがわれわれはどうであろうか？われわれロシア人とはそもそも何者であろうか？自己欺瞞はやめよう。ポーランド人や、ヨーロッパ人一般までもがわれわれをいかなる目で見ることになるかを理解するよう努めよう。われわれの努力にも拘わらず、彼らは今でもわれわれを禁断の家族に加えてくれないのだ⁴。われわれの歴史は別に作られて来た。われわれはヨーロッパと、その運命も発展も共にしてはいないのである⁵。われわれの現在の文明、われわれの学術、文学等々——これらはすべて歴史というものをほとんど持たない、最近のもので精彩に欠け、遅れた、弛まぬ模倣である。われわれはわれわれの発達を誇る事が出来ず、自分を他のより幸運な民族と並置することが出来ないのである。

と、われわれはこのように見られている、そしてわれわれは、このような見方の中に多くの正当なものがあることを自分でも感じている。現在、他ならぬポーランドとの闘いのその時に、われわれは自身の裡に何らかの支点を探し始めたが、さて何を見付けたであろうか。われわれが考え付くのは、民

族精神の唯一目に見える明らかな現れ、つまりわれわれの国家であり、それしかわれわれには無い。われわれは国家の統一性を創造し、守り、強固にした。われわれは巨大で堅固な国家を形成し、自身の、独立した生活の可能性を持っている⁶。危機や試練ならばわれわれにはかなりあった、が、われわれはそれを耐え忍んだ。われわれは自主独立という思想の側にしっかりと立っていた。それでいて今、不平を言うとすれば他人についてではなく、自分自身の事で不平を言うという悲しい特権を持っている。

しかしここから何が言えるだろうか。われわれにとって独立は大いなる幸福であるが、他者の目から見てその独立がどれ程の重みを持っているだろうか？われわれは言われるであろう。国家とはもちろん独立した生活の可能性ではあるが、生活そのものにはなお遠い、と。国家とはきわめて単純な形態、極めて基本的な現象形態である。最も野蛮で原初的な民族でも容易に国家を成して来た。国家が堅固であるならば、それはもちろん良い兆候であるが、しかし兆候に過ぎない。それは希望であり、民族生活の最初の声明に過ぎない。そしてそれゆえに、われわれがわれわれの国家を自讃しても、われわれが聞く答えはこうであろう。諸君が大いなる希望を与える野蛮人であることについては誰も論争してはいない、だが、それでもなお、諸君はやはり野蛮人である、と。

さて、ポーランド問題が大なり小なりその痛みを感じさせる傷とはかくの如きものである。ポーランド問題はわれわれにとって血と金の費えであるばかりでなく、それはロシアが身体的、肉体的苦しみを蒙る潰瘍である——否、この問題は毎度内面的な痛みを呼び起こすのだ。この問題は、その内面的な深い側面についてわれわれに深く考えさせる。ポーランド人の気持ちに早々と思いを致すというなら、われわれは端無くもわれわれ自身の気分はその反映を感じることになる。

以上の結論を少し試みてみよう。ポーランド人が高慢にわれわれを見なければならぬということは理解できる。その敵意ある態度とも相俟って、ポーランド人の高慢は千倍も強まり、ぎりぎり可能な境界に達するということが理解出来る。そういう要素は避け難く、また絶えることなく、この永遠の不和の内に存在している。それは、この問題の最も深く、純粋な源泉のひ

とつとなり、ポーランド人の努力と闘いに終わらない英雄的性格を与えている。不幸なる民族よ！汝は己の理解高きに比してその置かれている状況の^{まこと}実に不均衡であることをどれ程強く感じざるを得ないか！汝の文明の高ければ高い程、その感ずること鋭敏なる程、その言辞の優雅なる程、そして汝自身にとってもまたロシア人にとっても汝らの品位が明らかになる程、文明化されること少なき競争者たちが優勢であることに堪え難くなって来るのだ！汝らの高い文化は汝らにとっての罰である。他の^{ほか}民族ならばなお和解し、恭順の意を表することが可能な場合でも、汝らにとってはいかなる和解もいかなる恭順も有り得ないのだ。

ポーランド人の感情はそのような物であり、われわれは常に多かれ少なかれこれを理解して来た。彼らの高慢さもわれわれはその一分の正当さを認めて来たし、その結果として、彼らの教養に対して^{へりくだ}遜りもした。この謙遜は歴史の上でも実に明らかに現れた。ただ最近になって、わが帝国の各部分が同じ基準に置かれ、同じ法を用いようという要求がますます強く現れ始めた。これまでそのようなことは無かったのである。総じてこれまでわが国内のヨーロッパ文明に属する幾つかの部分は、時には多く時には少なく、様々な特権や特典を享受して来た。なぜそのような事が起きたか——理解出来よう。その理由とは、彼らも感じている彼らの優越であった。それゆえにこそ我々は、血の繋がった子を措いて、俗に言う生さぬ仲の子に対して為された最良についても滅多に不平不満を言いもしなかったのである。ヨーロッパに発する他国他民族の者達がわが国で得ることの出来る利益の総てはこの点にこそ帰さなければならない。

このように、多かれ少なかれわれわれは自らの教養の不十分を感じている。そして、ポーランド人との闘いは他の何にもましてわれわれの思考をあらためてわれわれ自身に向け、文明諸民族の序列におけるわれわれの低い位置をどうしても想起させる。ここに至ってわれわれは、わが国力とわが道徳的意義との不均衡を何よりも感じる事が出来る。

この意味からすると、問題は途方も無い大きさを持っている。実際のところ、このような観点に立つならば、ポーランド人がわれわれと同等の位置に立つことにすら同意し得ないであろうことは明らかである。あらゆるスラヴ

民族の中で自分たちのみが最高の文化に達したがゆえに、権利としても、また理念によっても、スラヴ世界の先頭に立って他の民族を指導するという中心的な役割はポーランド人のものでなければならない。この自負は、ポーランド人の状況から全く自然に生まれるものであり、彼らがこの自負を現実のものにしようとするのがあっても、これを非難することは出来ない。

とはいえ、然らず、としよう。次の様な事をわれわれは聞かされるとしよう。ポーランド人はその高慢と自負を断念する、ポーランド人は、他のスラヴ諸民族との均衡であれ、他のスラヴ諸民族の優勢であれ許容して、ただただ明白に民族的自立という理想だけに甘んじる、と。その様な思想は次第に強まって行き、遂には、ポーランド人の中で第一義的なものになるであろう、と進んで信じることにしよう。しかしながら、彼らのこの思想は、文明の優越という思想と激しく戦うことになるであろうこと、その勝利は今なお遥かに遠いということ——これを包み隠すことは出来ないであろう。

確かにポーランド人は固有の歴史を有している。その歴史の中で彼らは、程度の差こそあれ正しく、また程度の差こそあれ意識的に、自らの役割を演じ、野蛮人らの中での文明化された民族の使命を果たしてきた。高い文化を代表する者として、ポーランド人は絶えずこの文化の普及に携わって来た。隣接諸国のポーランド化を目指して来た。この目的の為の一連の不断的努力はここで容易に想起することが出来る。その様なヴィジョンを試みたところに取り込まれて来たのはひとり小ロシアだけではない。帝国の他のもっと小さい部分もそうである。この目論見はモスクヴァにも及んだ。モスクヴァまでもが、ポーランド化とラテン化の試みに曝されてきたのである⁷。

曖昧な細部や詳細は措き、問題を大略で見た場合、ここに最も正しく高潔な文明化の現れを見ずにおけるだろうか？手段が時宜に適っていたかについては言うまい。卑劣で貪欲であったかも知れない個々の目的についても言うまい。ポーランドが野蛮な諸民族にヨーロッパ文明の悪を広めようを目指し、彼らを闇から光へ連れ出そうと努めて来たという一般的な現象についてのみ語ることにしよう。

しかしながらこういうことはすべて何も意味していないのだと仮定しよう。こう言い返されるとしよう。ポーランド人は自らの歴史を認めない。

ポーランド人は現状のみを考えていて、過去は顧慮しない、と。そうだとしよう。しかし万一ポーランド人がこの重い要求を実行に移すことが出来たとして、それでもわれわれはポーランド人からより多くを求めなければならぬ。ポーランド人は自らの歴史のみならず、その成果、現に存在している歴史の成果をも拒絶しなければならないのである。

実際、彼らの歴史上の努力は実を結んでいる。場所によってはその身は成果を齎さず、別の場所では半ば成功し、また別の場所では完全なる成果を齎した。いずれにせよ、ポーランド人は多くを為したのであって、どうやら今この時にも、自らの働きの成果に対しても、いつかそれを完成しようという希望に対しても全き権利を持っているらしい。そしてここに、かつてはポーランドの一部であったロシアの地^{iv}に対する正しく、そして彼らの考えでは完全に合法的な要求の源があるのだ。それらの土地は物質的な資産であったばかりではない。幾分であれ、そして時期に違いはあれ、それらの地はポーランドの知的獲得にならねばならなかったし、ポーランドの文化の勝利に屈せねばならなかったのである。このように、ポーランド人をその自負のゆえに非難することは困難である。この自負心から来る要求を斥けることは、一ポーランド人にとって自らの文明の意義を斥けることを意味した。いずれかの地域においてポーランド化の事業が余り進捗しなかったにせよ、その事業はやはり始まったのであり、継続し得るものであり、従って、この事業を断念し、再びそれを手中にしようとしなければ、それは奇妙な事ではあらう。

すべてはポーランド人が自らの文明をいかに見ており、その文明に従おうと欲する人々をいかに見ているかにかかっている。ポーランド人の置かれている状況から当然のこととして生じる見解はいかなるものであろうか？ポーランド人は、例えば小ロシア人に何を見ているのか？ポーランド人の教養に比べれば、小ロシア人はいかなる教養も持っていない。ポーランド人の発達した言語に比べて、小ロシア人の話すのは、文学を持たない、粗野な、地方の方言である。ポーランドの神聖なるカトリック教に比べ、小ロシア人が告白するのは信仰ではなくシスマである。こういう人々は文明化しなければならぬ、こうなると、取るに足りない、希望も無いロシアの文明が、豊穡な

るポーランド文明に対して何故^{なにゆえ}優位を占めなければならないか？

あらゆる文明は傲岸であり、あらゆる教養は不遜に振舞う。多かれ少なかれ、文化によって発達した人々と、蒙昧な文化しか持たない植物的な、が、大規模な民族の一団との間には常に反目が生じる。われわれ自身の側に、民族を文化の為の単なる素材と見なす観点、その形が文化によること少ないざらついた粘土であると見なす観点が時に生ずるとしよう。そうだとすれば、目下のポーランド問題における程、歴史の歩みによってそのような観点が強くなったことは無かった。今ここにポーランド問題は本質的な結節点を成し、それゆえ恐ろしい力を持つまでに拡大し、強まったのである。

ポーランド人は自らの文明を誇りに思っている。彼らはこの文明の恵沢のすべてを高く評価し、その優越にしっかりとしがみ付いている。それを理由に誰がポーランドを誇る事が出来ようか？誰がここに何か悪しきものを見出し得ようか？

このように、問題はこれ以上ない程に錯綜している。この問題をこの上なく重いものにしてしているのは、そこにある文明という概念なのである。この概念を前には、独自の民族などという思想も後景に退く。ポーランド人は心の底から自らを文明の代表者とみなすことが出来るのであり、われわれとの終り無い闘争の内には、ヨーロッパ精神とアジア的未開の闘争を直視することが出来るのである。

これに反してわれわれは何を言い得るだろうか？ここまでわれわれは、ポーランド人の利益になることばかりを出来る限りはっきりと示そうとして来た。意見の分かれる所、本質的でない所はすべて省略して、ポーランド人の置かれた状況そのものから、まず十中八九望みの無い彼らの要求の正当なることを引き出した。では、われわれは自分の利益になる何を言い得ようか？

ここまでの結論を短く纏めてみよう。

ポーランド人の高慢と要求はそのヨーロッパ文化に発している。

高慢とこれらの要求は満足されず、ゆえにポーランド人の不幸を成している。

それらの要求がわれわれを犠牲にしてのみ満足されるとすれば、それはわ

れわれにとって侮辱となる。

或いはこの侮辱はその深刻さにおいてポーランド人の不幸に等しいかも知れない。だが、われわれが蒙っている災難、良く分かっていなければならぬ災難がある。つまり、ポーランド人の不幸は明々白々であるのに、われわれの不幸は明々白々でない、ということである。

実際のところ、われわれが野蛮人であり、ポーランド人が高度に文明化された民族であるという立論にすべては端を発している。従って、ここから導かれる結論を覆すためには、われわれはいずれ次のことを証明しなければならないであろう。

- 1) われわれは野蛮人ではなく、文明の力に満ちた民族であるということ。
- 2) ポーランド人の文明とは、その根源において死を孕む文明であるということ。

容易に同意出来るのは、どちらも証明が極めて難しいということである。

明らかに、われわれの方の問題は完全に正当化出来るであろう。仮にわれわれがポーランド人にこう答えることが出来れば、だが。「諸君は誤って自ら意義高きものとしている。諸君は自らのポーランド文明に眩惑され、その眩惑の内に、次のことを見ようもしないし、見る事が出来ないでいる。すなわち、諸君が戦い、競っている相手は、アジア的野蛮ではなく、別の文明、より堅固でしっかりとした、わがロシアの文明なのだ、ということ」⁸。

こう言うのは簡単だが、われわれはそれでも、どうやって証明出来るのかと問いたくなる。われわれロシア人以外の誰もわれわれの要求を信じることは出来ない。なぜならばわれわれは、そのような要求をはっきりと正当化することが出来ないし、ロシアの文明が現実であることをわれわれが認めさせ得るような明瞭な、そして誰をも説得し得る兆候、現象、成果をひとつとして示すことが出来ないからである。すべてが原初的で明瞭ならざる形の内にある。すべてが未来を孕んでいるが、今のところは不確かで混沌としている。われわれは事実によってではなく仮定によって釈明しなければならない。成果ではなく希望で、現にあるものによってではなく、あるだろうもの、あり得るものによって釈明しなければならないのである。

われわれにも自分の利益となることを示すものが若干あるにはあるが、それらで満足することは難しい。それらがすべて、肯定的ではなく否定的な性格を持っているからである。それは、ポーランド化の試みがすべてロシア領では大きい障害にあったこと、小ロシアとモスクヴァで、それらの試みの大部分が不屈の打ち克ち難い抵抗に遭ったという点なのだ。その時ロシアの要素は並々ならぬ粘り強さを、それも物質的な、肉体的な粘り強さではなく、精神的な不撓不屈を示したのである。このロシア的要素は、己を道徳的に屈従させようとした文明に対するに、上面のものでない自覚的な執拗さを以てした⁹。

これをもってわれわれは或いは野蛮人ではないかも知れない、ということになる。或いは、われわれの内に深甚かつ豊穰なる精神があるのかも知れない。それは未だしかと明瞭になったことが無いとはいえ、すでにして用心深く自らの独立を守り、自分の独自の発達を妨げるいかなる影響も撥ね付けることの出来る程に強固で、いかなる異質の精神にも自分たちに権力を振るわせることのない精神である。

ポーランドがわれわれにとって近親のものであるということ、ヨーロッパは何よりもポーランドを通して身近にわれわれに働きかけることが出来たのだということ、そして、われわれはポーランド人と絶えず衝突して来たということ、そういったことどもにも拘らず、われわれは一度としてポーランドの精神的な影響を受けたことは無かったし、ヨーロッパ人に倣い、ヨーロッパ人の発展を取り込もうと考えた時にも、ポーランド人を通り越してオランダ人やフランス人の方に向ったのである。われわれは執拗にポーランドの影響を撥ね付けながら、それでも、それがいかに緩慢で弱いものに見えたにしても、自らの発展の道を前進して来たのである。

これらすべてが証明するのはただひとつのことである。われわれは自身を守り、心して独自の発展をする十全の可能性を持っているということである。だがそれ以上のことを引き出すのは難しい。別の側面を見よう。われわれがポーランド文化に欠陥を見出すことにしたと仮定しよう。この問題におけるポーランド文明の意味を消し去るために、われわれが指摘出来そうなのは、その美点を台無しにしてしまう幾つかの本質的な欠陥である。われわれ

はこう言うことが出来るだろう。「歴史そのものが諸君の文明を断罪している。この文明は諸君の国民に堅固さを与えなかった、健康と力を齎さなかった。つまり、それはノーマルな文明ではなく、もしかしたら、本物の悪、諸君の国民の生活をその影響によって害^{そこな}う破壊的要素であったかも知れない。ポーランドの発展は病的なものであり、その教養はその病を癒す力を持たなかったばかりか、この疾病の原因そのものであった。」

われわれがこう言ったと仮定しよう。だがそうだとすると、ポーランド文化の本質的な欠陥をどこに置くことが出来るのだろうか？ポーランド文化の異常の根はどこにあるのだろうか？民族的、スラヴ的でなかったという点にあるのではないだろうか？ポーランド文化にはいかなる独自性も無く、それゆえ民族精神と融け合って堅固な全体を成すことが出来なかったのではないだろうか？ポーランド文化が発達できず、国民生活を堅固なものとして出来なかったとすれば、そのような事が生じたのは単に、その文化が生活の諸要素と調和せず、その生活の正しい現象とならず、従って、堅固で正しい文明ならば持っている筈の力を持っていなかったからである。

われわれがこのように考えて、ポーランドの運命は彼らの内輪の避け難い問題であるとして自ら安んずることにしたとしよう。だが問題全体はそのような慰藉にあるのではないのだ。ここでわれわれが自分自身を振り返らないとすれば、われわれは許し難く軽率になってしまう。われわれの評価が厳しければそれだけ、われわれはより大きい責任を負うことになるのである。今回の衝突においてわれわれは、自分たち自身の文化を尊敬することがなければ、ポーランド文化の意義を低めることが出来ないのである。反論する者があるだろう。一体諸君の文明とやら言うものの方が上であると誰が請け合うのかね？と。諸君の文明は、やはり病の萌芽^もを有っていて、それがいつの日にか諸君の国家の大きな図体を破壊することになるのではないかね？と。諸君の文明は民衆の特徴と一致するのかな？と。そして、諸君の文明は民衆に、不具や死ではなく、もっと満ち足りた生活を齎すのかな？と。

このような問いがわれわれにとってどれほど重いか、どれほど不利益な意味を持ち得るか、他国の人からすれば、思うだに恐ろしいことである。他国の人々は独自のロシア文明など考えただけで笑ってしまうのではないだろう

か？ロシアの文明を擁護し、期待を寄せること、その未来を予見すること——これは正真正銘の夢まぼろしであり、ヨーロッパの誰の目からしても虚しい仮定ではあるまいか。

ただわれわれのみが、ロシア人だけが、この問題を真剣に受け留めることが出来る。われわれの名誉をわれわれなりに救うために、われわれはわれわれの国家の偉大なる身体を産んだその民衆が、自らの裡に魂を保持していることを認めなければならない。その精神生活が堅固で健全であること、その生活が、時と共に発展し、国家の堅固さと力とに顕れた如く、広く、そしてはっきりと姿を現していることを認めなければならない。

ここで非常に重要なのは、われわれが他ならぬ民衆を、民衆の独自の原理を信頼しなければならない、ということである。ヨーロッパの文明に関しては、ヨーロッパの見せ掛けの、外面的な文明については、われわれはポーランド人の後塵を拝する。しかしながら、民衆の、古来の、健全な文明においてわれわれはポーランド人を凌駕しているし、少なくとも、ポーランド人にも、またいかなる他の民族にも後れを取るまいとしていると信じても良からう。

ことは瞭然としている。もしもわれわれがヨーロッパ通有の物差しで自身を測り、民族とか国家とかいうものは大なり小なりその啓蒙の度合いによって差が生じるのだと考えるならば、ポーランド人はわれわれよりも遥かに^{たか}高処に立つことだろう。もしもわれわれが個々の民族に大なり小なり独自性を認め、多少によらず独特なところを認めるのならば、われわれがポーランド人よりも低い位置に立つなどということはなく、あるいはポーランド人よりも高処に立つであろう。

ロシアの地に自らの運命を、自らの遠大で重要な使命を持つ限り、ポーランドはロシアの地域に対するいかなる権利も持っていない。そして、古来よりの地域をわれわれが守り、正にそうすることによって彼らポーランド人を偉大なる発展に導き入れる時のみ、われわれは正しいのである。その発展の中でのみ、ポーランド人は自らの真の幸福を獲ることが出来るのである。

この宿命的問題の最終的な結論はいかなるものであろうか？この問題の正

しい出口と和解の希望はどこにあるのだろうか？

読者諸兄は、われわれの述べたところをご理解頂けたならば、われわれがここで問題の外面的な事を言っているのではなく、ポーランド人とロシア人の間での権利や地域の分配を考えている訳では決してないとお分かりになるに違いない。われわれが念頭に置いたのは、ただ二つの民族の内面的な傾向であったし、われわれは二つの民族が戦うに際して、両者の内で疼いている内面の痛みの源泉を辿ろうと努めたのである。それゆえに今われわれが問うのは、精神的な快癒を希望出来るようになるには、両民族の傾向がどう変わるべきかということのみである。

われわれロシア人に関して言えば、明らかに、われわれはより大きな信頼と希望を以て民族の諸原理に向き合うべきである。ロシア民族の精神生活の、今なお混沌として、未だ形成されず、明らかならざる諸要素の未来を信じ得るその時にのみ、われわれは自分でも正しいと思えるであろう。だが信じるだけでは足りない。希望によって自らを慰めるだけというのは恕し難いことである。われわれには、それらの要素を理解し、その発展を辿り、力を傾けて扶ける義務がある。民衆への信頼は或いは甘く、輝きを放つ希望は快いものかもしれない。しかし苦いことも忘れないようにしよう。われわれには重い責任——われらが民族の誇りと力を認めるという重い責任がかかっていることを忘れないようにしよう。

ポーランド人について言えば、彼らの前にも困難な課題がある。ポーランド人は、明らかに、自らの誇りのうち、その高い文明に頼っている部分を放棄しなければならない。ポーランド人が独立したとしても、その時もおポーランド人は、教育によって吹き込まれた内なる不遜を抑えなければならない。さもなければポーランド人は、ロシアの増強と、自領のいくつかがポーランドの影響下から出ていくという事態を招いて苦しい思いをすることになる。それは決して抑えることが出来ないであろう。

宿命的問題における内面の縛りは、このようにしてのみ和解と解決が可能なのである。逆に、これらの条件が満たされなければ、今後の一層の不幸を免れることは想像するだに困難な事である。もしもロシアが堅固な精神力を保持せず、未来においてそれを明瞭で強い形で現わし得ないならば、その時

ロシアを脅かすのは永遠の動揺であり、永遠の危機であろう。もしもポーランドがその教養の誇りを棄てなければ、ポーランドは、避けようもなくその力を度外れに緊張させ、満足させることは出来るが、極めて困難な、否、不可能でさえある要求を抱え続けることになるだろう。

何という課題であろう！口にするのがこれほど簡単なこれらの言葉に、なんと測り知れぬ困難があることだろう！

ロシアの精神力だって！そんなものどこにある？われわれの他に誰がそんなものを信じるというのだ、明々白白たる形で、争う余地のない権威を以てそれが顕れてもいないのに？だが、その精神力が発展し、展開していくには、長い闘争、勤労、時間、苦しい努力、そして涙が必要なのである。

自身の文明の誇りを棄てるだと！一体それが容易いことなのか？ひょっとしたら、そんなこと全く不可能でさえあるんじゃないか！なぜなら文明とは人間の血肉であり、文明が高い所にある幸福であって、歴史ある民族の名誉であり誇りであるというのはもっともなことなんだ。だが、まるで聖物の為に死す如く、文明の為に死すことほど奇妙なことは無いのである。

この宿命的問題の解決にあたって、ふたつの近しい民族の血が流れることの能う限り少なからんことを、われわれは衷心より願うことにしよう。われわれのありったけの希望を以て、最も平和的で最も破滅的でない、この問題からの出口を訴えることにしよう。しかしながら、この問題は内的な源泉をより深く知る程良いのである。われわれが相互の関係をもっとはっきりと意識するなら、それだけ正しい境界を引くことが出来るのである。それゆえに、この問題の内的な課題が持つあらゆる困難さを己から隠すことはしないようにしよう。ポーランド問題は、恐らく、これから長く深刻なロシアの問題であり続けるだろう。この問題が困難で重要であればある程、それだけ一層、われわれはこの問題に関する自らの義務を意識することが必要なのである。

原註

- 1 ストラーフはポーランド蜂起の根本的とされる性質についての、「陳腐」で皮相的な概念——世界主義と民族主義——を斥けたが、それは正に本質的な特徴を見落とすことを惧れたからである。彼の見解では、「ポーランド問題」の注意深い観察によってこの本質的特徴を見出すことが出来たならば、問題の正しい、とはいえ、ポーランド人にとってもロシア人にとっても困難な解決が発見されるのである。雑誌『ザリヤー』（Заря）に掲載されたニコライ・ヤーコヴレヴィチ・ダニレフスキイ（1822-1885）の「ロシアとヨーロッパ」の出版される既に6年前、ヨーロッパとロシアの文明の衝突の理解においてストラーフは、自らの歴史哲学で文明論的アプローチに頼っている。ストラーフはこのアプローチの一般的な思想を公式化しただけであり、ダニレフスキイが文化史の諸タイプについての完成された教えを創造したのだとしても、19世紀の60-70年代に視点の合致したことが、ストラーフをしてこの教義の熱心な支持者たらしめたし、ダニレフスキイの死後は、ヴラヂーミル・セルゲーヴィチ・ソロヴィヨフ（1853-1900）による誹謗攻撃に対するエネルギッシュな擁護者たらしめた。
- 2 スラヴ派イヴァン・ヴァシーリエヴィチ・キレーエフスキイ（1806-1856）の論文《Обзорение современного состояния литературы》*Киреевский И.В. Избранные статьи. М.: Современник, 1984. стр.148-149.*
- 3 西欧を「聖なる奇蹟の国」と呼んだのはスラヴ派のアレクセイ・ステパーノヴィチ・ホミャコフ（1804-1860）で、詩《Мечта》（1835）においてである。

・・・ Ложится тьма густая

На дальнем Западе, стране святых чудес.

Век прошел, и мертвенным покровом

Задернут Запад весь. Там будет мрак глубок.

Услышь же глас судьбы, воспрянь в сияньи новом,

Проснися, дремлющий Восток!

- 4 1858年から1861年、パリでФранциск Духинский（フランチシエスク・ドゥヒンスキ）（1817-1880）の三巻本《Peuples Aryas et Touras》が出た。彼は、ポーランド人とウクライナ人はアーリア起源の民族であり、モスカリーⁱⁱはツラン族、つまりフィン人とモンゴル人の混血であると主張していた。従って、この著者による結論は、「ルーシ」の版図は古来ポーランドの土地であり、ウクライナ語はポーランド語の一方言であるというものであった。モスコヴィヤⁱⁱⁱは、ポーランドと全西欧を脅かす野蛮な国である、と。当然のことながら、Ф.ドゥヒンスキの

この人種差別的理論は西欧で広まり、支持を得たが、ポーランドの上流階級の間では、「奪い取られた土地」、つまりベラルーシとウクライナ右岸の広大な領土がロシア帝国に含まれていることについての不満が後押しをした。

- 5 6年後、ストラーホフが編集に携わっていた『ザリヤー』誌に掲載されたH.Я.ダニレフスキの「ロシアとヨーロッパ」の中で、同様の思想が発展させられている。「ヨーロッパはロシアとスラヴ民族を自己にとって何か異質なもの、異質であるだけではなく、敵対的なものと見なしている... ヨーロッパはゲルマン-ロマンス文明の活動する舞台である... この意味でロシアはヨーロッパに属しているののだろうか？ 否、残念なことに、そして喜ばしいことに、幸か不幸か——属してはいない。ヨーロッパが自ら破壊した古代世界の土壌から直接、恵みも毒もある汁として吸収するのに用いて来た根を、ロシアはひとつとして持ったことが無い。ゲルマン精神の深みから養分をくみ取る根を持ったことが無い。」
- 6 ポーランド人の自負心の背後にヨーロッパ文明への帰属意識があるとしても、実際それは国家としての独立によって補強されたものではないが、ロシア史においては強い独立国家という事実が余りにも際立っている。この国家をロシア民衆が創り、守り、そしてあらゆる方法で増強して来たのである。自分たちの独立した生活の可能性として。外部からのあらゆる侵害に対する、独自のロシア文明の守りとして。
- 7 モスクヴァが現実にはポーランド化とラテン化の試みを蒙ったのは1604年、偽ドミートリイ支援の名目でポーランドによる最初のロシアへの武力干渉が起きた時である。1607年から1608年に、ポーランドの大地主たち（^{マグナートイ} магнаты）は新たな山師偽ドミートリイ2世を担ぎ出した。ポーランドの干渉は、ロシアの国民義勇軍がその流れを決定的に変えた1611年まで続いた。
- 8 これについては、ダニレフスキが自著『ロシアとヨーロッパ』の中で語っている。「ルーシの創設からミーニンの時代に至る750年は、道徳的・精神的な結び付きを持つ、唯一の完全な民族的有機体を創造した」、と彼は主張している。「この民族精神が無ければ、どんな国家も腐敗物であり、灰燼である。だが国家とは、民族精神を守るために存在するものである。民族性を擁護する中で顕れる民族精神に、その民族精神によって鼓舞されつつ、美しい姿と統一性を与えるために、国家は存在するのである。この美しい姿と統一性が無ければ、最も活発な民族精神といえども、ポーランド国家よりも巧みに勢力をまとめ、方向を与えられた相手と闘うとなれば不十分なものとなろう。」

Данилевский Н.Я. Россия и Европа. М.:Институт русской цивилизации. 2008, С.361.

- 9 17世紀初頭、ポーランド貴族の侵攻に抵抗するため、ニジェゴロドの商人コジマ・ミーニン（クジマ・ミーニチ・ザハロフ・スホルーク）はД.М.ボジャルスキ公とともに国民義勇軍を組織した。

- 10 ストラーホフは筆名無しではいられなかった。雑誌「時代」では、彼は多くの評論を手掛けており、筆名を用いなければ各号の目次は彼の苗字だらけになってしまうからである。特に、彼の論文「宿命的問題」が「ロシア人」という署名で掲載された『時代』1863年4月号には、ストラーホフの二篇の論文が彼の苗字で、そして更に二篇が彼の筆名Н.Косицъ (Н.Косица) で掲載されている。

訳註

- i 『ヴレーミャ』掲載時は、本名の「Н.Н.ストラーホフ」ではなく、筆名のРусский (ロシア人) で署名されている。原註10を参照。
- ii ロシア人に対する蔑称。
- iii モスクヴァ大公国のこと。
- iv ポーランドの反乱は、1830年から1831年の十一月蜂起においても、1863年の一月蜂起においても現在のリトアニア、ベラルーシ、ウクライナにまで及んだ。